

## 落人伝承と崇り神：唐津周辺のキシダケパッション

田中丸, 勝彦  
日本民俗学会

<https://doi.org/10.15017/2320987>

---

出版情報：九州人類学会報. 14, pp.48-49, 1986-06-25. Kyushu Anthropological Association  
バージョン：  
権利関係：



# 落人伝承と祟り神

## — 唐津周辺のキシダケバツソン —

田中丸 勝彦

佐賀県唐津市の周辺には落人伝承をともなった、バツソンサン(末孫さん)またはキシダケサン(岸岳様)と称する祟り神がある。合わせてキシダケバツソンと呼んだり、対象物の形状からゴリンサン(五輪様)ゴリンドサンなどということもある。この名称は、文禄・慶長の役の折、秀吉によって滅亡させられた岸岳城主波多三河守およびその子孫を意味する。

波多家は松浦党の党主として中世以来徳須恵(現・北波多村)の岸岳城を居城にして、上松浦地方を領してきた。三河守親の代に秀吉は朝鮮出兵のため名護屋に城を築き、大がかりな陣を敷いた。その命令で三河守も出兵したが、戦いぶりに卑怯な振舞があったとして筑波に流された。領地は取り上げとなり、代って寺沢志摩守広高が当地方を治めることになった。残された波多家の一族郎党は落ちのびた先で割腹して果てたり、隠れ住むことになった。唐津周辺にある宝篋印塔や五輪塔・一石五輪塔などは波多家家臣の墓であり、その怨念はいまだに続いているとするのが唐津地方のキシダケバツソンの“いわれ”である。

キシダケバツソンの祟りの事例は、いま手元に集っているものだけで約250例だが、これはこんご調査をすすめてゆけばまだかなり増えることが予想される。東松浦郡鎮西町打上の横竹では、

病気にかかった人が近くのオガミヤに拜んでもらったところ、岸岳の落人の霊が誰にも祀ってもらえずにいると説明され、碑を建立し水を供えるようにといわれた。このオガミヤの話によれば、山中や道端の碑はキシダケバツソンの祟りを鎮めるために建てられたのだという。

唐津市見借では、

山中に30~45センチほどの五輪塔が祀られている。これはキシダケバツソンの墓と伝えられて誰も近づかない。近くの木を切ったり不浄な行為をすると祟られる。祟られると急に高熱がでて体が振える。大変にのどがかわく。それで大量の水をお供えする。誰かわからないが時々祀っている人があるらしく、水と花・線香が供えられていることがある。キシダケバツソンに祟られたら稲荷を信仰しているオガミヤに拜んでもらう。

キシダケバツソンの祭祀対象は一石五輪塔や自然石・木の根方・宝篋印塔・肥前板碑などで、他に塚や方柱という例も少しある。自然石や木の根方は別としても、一石五輪塔や宝篋印塔の多くは中世の供養塔と推定され、岸岳落城よりは古いことになる。

これらの碑塔類が祀られている祭場は田畑や藪・林など人家近くのものもっとも多く、山中・山麓などに祀られている例は少ない。近年はこれを屋敷内に持ち込んで祀る傾向がみられる。

キシダケバツソン信仰には特定の祭日がないのが、他の小祠信仰に比べると特徴で、強いて祭日を求めるならば、春の初午前後と秋の収穫後ということになる。前者は稲荷信仰との習合であり、後者は丑の日祭りなどの収穫祭との習合かと思われる。多くの場合、オガミヤ・ウラカタと呼ばれる民間宗教者の勧めによって、不定期に祀られている。

祭祀は線香・花・果物・菓子などのほか、どんぶり一杯とか釜一杯と表現されるほどの大量の茶・水を供える。これは周辺地域でみられるオチャトーという民間の呪的療法に類似している。

また多くの場合、祭祀組織と呼べるものがほとんどなく、すべて個人祭祀である。個人祭祀でありながら、祭祀の形態に共通がみられるのは、ひとつには民間宗教者の関与もかんがえられる。

祟りのかたちはさまざまである。多いのは高熱・悪感・振えなどだが、なかには事故や死などもキシダケバツソンの祟りと解釈される場合もある。

一般に個性の強い横死者の霊は怨霊となってこの世に災いをもたらすが、これを丁重に祀ることによって他の悪災を除く、いわゆる御霊に転換するとかんがえられている。ところが、キシダケバツソンの場合は前者のみが強張されて、後者の例はほとんどみられない。これは何を意味するのだろうか。

唐津市西十人町の南禅寺派少林寺では波多三河守および家臣の位牌を祀っている。この寺の開基は寺沢志摩守広高とされる。つまり怨霊を恐れた戦勝者が負者の霊を祀っているのである。

キシダケバツソン信仰の分布は唐津市を中心としてほぼ東松浦郡内に広がっている。これは旧唐津藩領ということになる。そしてその周辺部では獅子ヶ城・高祖城などの落人の伝承と祟り神が結びつけて伝えられている。伝承内容や祭祀形態等にもキシダケバツソンとの共通がみられる。

また、周辺民間信仰のヤブガミ・ヤブサガミ・金神・荒神・稲荷・屋敷神・イロハモリ・民間療法などにもかかわりがみられる。

唐津周辺では岸岳の落人を家の先祖だという伝承が多い。呼子町小川島は波多三河守が開いたというし、唐津市太良の堀田・松本家は岸岳さまの子孫だと伝えている。浜玉町鳥巢では一石五輪塔をキシダケバツソンの墓として祀っている。昔城を追われた先祖は年の晩になってやっと鳥巢にたどり着いた。正月の餅を搗くひまがなかったので、大根を輪切りにして餅の代りに神棚に供えたという。鎮西町打上の坂口家ではみの笠をつけて元朝に餅を搗くが、これもまた岸岳の落人伝承と結びつけて語られている。

同じ落人の伝承が家の先祖として丁重に扱かれる一方、怨霊として恐れられる例が多いのはどうしてだろうか。

これを時間の経過の中で促してみた。岸岳落城は慶重元（1596）年、寺沢氏の検地や藩政についての批判がなされるようになったのが文化三（1808）年、各庄屋家などで波多家家臣を組み込んで系図などを作成し始めたのが嘉永元（1848）年から明治十二年にかけて。祟りを強調するようになるのは昭和、それも戦後のことである。